

『改正増補英語箋』（住田文庫蔵） 下巻の増補語彙と薩摩辞書

—「魚介」部門と「蟲」部門—

下河部 行 輝

はじめに

『改正増補英語箋』（住田文庫）における下巻の「魚介」部門に収録された語彙数は七五語ある。これから、同じ題名の東京版に収録された語彙を取り除くと、東京版にない語彙数は三四語となる。つまり、東京版にはなくて、大阪版にのみ見られる「魚介」部門の増補語彙は三四語であるという意味である。同じく「蟲」部門は、収録語が全部で四六語、そのうち増補された語彙は一七語である。『岡大論稿』19号で示したようにこれらの増補語彙は、『英語箋』から収録されたとかんがられるものは、「魚介」では四語、「蟲」部門では皆無であって、残りの増補語彙は、『薩摩辞書』か、他のものからと判断されるのである。「魚介」の三四語のうち、『英語箋』からは四語で、他の三十語のうち、三語は、今のところ典拠不明とせざるを得ぬのであるが、二七語は『薩摩辞書』から採り入れたと思われるものである。『英語箋』の四語のうちの一語は、『薩摩辞書』とも同じと判断されるので、実数は二八語となる。不明の三語は今後の課題として措かざるを得ない。「蟲」部門の一七語の増補語彙のうち、『英語箋』からは皆無であるが、全ての語彙、一七語が『薩摩辞書』と関係があるものと判断される。以下、「魚介」部門と「蟲」部門の実態を示そう。尚、『改正増補英語箋』の実態の末尾に印した記号と括弧の意味は、前回同様の意味を持たせてあるので、『岡大論稿』19号を参照されたい。

2 「魚介」部門の増補語彙

2-1 『英語箋』における「魚介」部門の増補語彙

『英語箋』における『薩摩辞書』と関わる増補語彙は次の語彙である。

鰻魚（イワシ）*Pilchard*.（ピルチアド）◎

蟹（カニ）*Crab*.（クレーブ）◎

過臘魚（サケ）*Salmon*.（セマン）☆

- 白魚 (ニゴビ) *Barbel.* (バアベル) ◎
 編魚 (ヲシキウヲ) *Bream.* (ブライム) ☆
 鮪魚 (アメウヲ) *Chub.* (チャップ) ◎
 鱈魚 (ハエ) *Dace.* (テイス) [テ→ま] ◎
 海豚魚 (イルカ) *Dolphin.* (ドルヒイン) ◎
 飛魚 (トビウヲ) *Flyingfish.* (フライイングフィッシュ) ◎
 鯨魚 (カワギス) *Groundling.* (グラウトリング) ◎
 雙髻沙魚 (シュモクザメ) *Hammer head.* (ハンマアヘッド) ◎
 杜父魚 (カワヲコビ) *Millers thumb.* (ミルラアスサアンム) [注 ラコビのビはま
 ま] ◎
 鱚魚 (シミ) *Moth.* (モース) ◎
 鰻魚 (ボラ) *Mullet.* (マルレット) ◎
 一角魚 (イッカクギョ) *Narwal.* (ナアウラル) ◎
 鋸沙魚 (ホコブイカ) *Saw-fish.* (ソヲフィッシュ) ◎
 鱈魚 (テウザメ) *Sturgeon.* (スタールジュン) ◎
 亀甲 (カメノカウ) *Tortoise-shell.* (トルチズセール) ◎
 鮎魚 (ドジャウ) *Loach.* (ローチ) ☆
 鋸沙魚 (ホコバコ) *Saw-fish.* (ソウフィッシュ) [ウ→ま] ★
 鯉魚 (サンシャウウヲ) *Salamander.* (セレマンダア) ◎
 水獺 (カワウソ) *Otter.* (ヲッタア) ◎
 牝魚 (メウヲ) *Spawner.* (スベウナア) ◎
 雄魚 (ヲウヲ) *Milt.* (ミルタア) ◎
 鯨油 (クジラノアブラ) *Trainoil.* (トレインマイル) ★
 魚ノ膀胱 (ウヲノイバリブクロ) *Swim.* (スイーム) ★
 鰻魚 (アラ) *Cod-fish.* (コッドフィッシュ) ◎
 生洲 (イケス) *Cauf.* (コーフ) ◎

この部門で問題となるのは、鋸沙魚である。訓が一つは〔ホコブイカ〕であり、また一つは〔ホコバコ〕である。英語のルビも、Sawの訓が〔ソヲ〕と〔ソウ〕である。この訓は現代の国語大辞典(小学館版)にも登録されておらず東條操編の『全国方言辞典』『改訂総合日本民俗語彙』(平凡社)等にも見当たらない。ただ『日本国語大辞典』には「ほこぶか」(鉾鱈)は「鋸鯨」の異名として登録されており、用例として、『重訂本草綱

目啓蒙】(-40・魚の部門)〔鮫魚(略) 鋸鯊(略) ほこぶか ほこわに]を示している。Saw-fishは、今日の英語辞典では、「のこぎりえい」の訳語であり、cf.としてSaw-sharkを指示している。同じ漢字に対して、訓が二様という、しかも同一部門であることを考えると複数の人間による語彙収集ということが浮かびあがらざるを得ない。〔ホコブイカ〕も〔ホコバコ〕も「ほこぶか」を想起させるのだが、方言という即断は今では差し控えたい。今後の課題として措く。

2-2 『薩摩辞書』にみる〔英語箋〕に採り入れられたと思われる語彙の実態

- Pikehard*, s. (ピルチャルド) 鯰魚(イワシ) ノ一種大ナル者
- Crab*, s. (カラップ) 蟹(カニ)。意地悪(イヂアシ)キ人(ヒト)。大石(タイセキ)ヲ上(アグル)ル道具(ドウグ)。巻鞭(マキロクロ)ノ類(ルイ)。山査子(サンザシ)
- Salmon*, s. (サルモン) 松魚(サケ)
- Barbel* s. (パールベル) 白魚(ニゴビ)〔注 *Barbel*の後の” , “はない〕
- Bream* ,s. (ブリーム) 湖魚(ミヅウヲ)ノ名(ナ)〔鰱魚(ヲシキウヲ)〕
- Chub*,s. (チョブ) 鯉魚(アメウオ)ノ一種(イッシュ)
- Dace*,s. (デーシ) 鱈魚(ハエ)ノ類(ルイ)
- Dolphin* ,s. (ドルフィン) 海豚魚(イルカ)
- Flyingfish*,s. (フライイン フキシ) 飛魚(トビウヲ)
- Groundling*,s. (グロウンドリン) 沙魚魚(カハギス)。下賤(ゲセン)ノ人(ヒト)
- Hammer head* ,s. (ハムムルヘッド) 雙髻沙魚(シュモクザメ)
- Millers thumb*,s. (ミルレルソム) 杜父魚(カワラゴゼ)
- Moth*,s. (モッツ) 蠶魚(シミ)。同蛾(ヒイロ)
- Mullet*,s. (モルレット) 鰱魚(ボラ)
- Narual*,s. (ナーウアル) 一角魚(カクギョ)
- Saw-fish*,s. (ソーフキシ) 鋸沙魚(ホコブイカ)
- Sturgeon*,s. (スチュルジョン) 鱈魚(テウザメ)
- Tortoise-shell*,s. (トルトイス—) 龜甲(カウ)〔殊(コト)ニ瑠璃殻(タイマイコク)ヲ云〕〔shell〕にルビなし。
- Loach* s. (ローチ) 鯉(ドジョウ)ノ一種(イッシュ)〔短小(タンショウ)ナルモノ〕
- Saw-fish*,s. (ソーフキシ) 鋸沙魚(ホコブイカ)
- Salamander*,s. (サラメンドル) 鯢魚(サンシャウウヲ)ノ属
- Otter* ,s. (ラットル) 水獺(カハウソ)

Spawner.s. (スボール子ル) 牝(メ)魚

Miller.s. (ミルトル) 白子ノ有(ア)ル魚〔即チ雄(ヲ)魚〕

Trainoil.s. (トレールノイル) 鯨油 (ケイユウ)

Swim.s. (スウキム) 魚(ウヲ)ノ膀胱 (パウコウ)

Cod-fish.s. (コードフィシ) 鯨魚 (アラ)〔注 フィシの「イ」はまま〕

Cauf.s. (コーフ) 生洲 (イケス)〔魚ヲ畜フ〕

2 3 「魚介」部門のまとめ

Saw-fish の訓が「ホコブイカ」でそれがそのまま『改正増補英語箋』に採り入れられていることに注意願う。だが、『改正増補英語箋』では、なぜ同じ語を二度採用しているのか、そしてその訓が「ホコバコ」として別訓を付けているのかが問題である。『薩摩辞書』は英和だが、『改正増補英語箋』は和英であるので、別訓の語は、漢語と漢語ルビだけを見れば、別の語として入れる可能性が出てくる。時間を掛ければそれは直ぐに見分けることの出来た筈のものであるが、ここに編者の態度の一端が伺われるのではないかと思う。

Salmon の漢字が、「松魚」であるが、これは、『大言海』では、「鮭ノ、朝鮮名」としてある。『類聚名義抄』を始め、日本の代表的な節用集は、全て「鮭」であって、『和英語林集成』においても「鮭」の漢字である。『贅言字考節用集』では、「鱈」の漢字を列挙しているが、やはり多くの辞書類は「鮭」である。『改正増補英語箋』の「過臘」は漢語であるので、両者の借用関係は、確かなものではないが、共に、「鮭」を採らず、「松魚」を捨て、漢語に切り換えたとも思われ、一応の関係ありとしたが、尚、考えねばならない。*Bream* の「鱒」を『改正増補英語箋』では「編」としているが、これは字音が同じところからの、誤用ではないかと考えられる。「鱈」は漢語であって、「ラシキウオ」の訓もあるのだが「編」では意味が通らないのである。*Loach* は「鱒」は漢語であり、「鱒」は国字である。「過臘」に合わせれば、『改正増補英語箋』は一貫しているとも取れる。*Trainoil* は、訓と字音との相違であるので、両者の関係はあると見られるが、これは余りにも一般的な語であるので、問題がないとは言えないが、今はこのままにして置く。

Swim は漢字の訓は音の相違であって、これは「鯨油」と合わせたものと考えれば、問題はないと思う。

Spawner と *Miller* は、両書の関係を示しているものの証拠とも言える。*Spawner* は今日の英和では、「産卵期の魚」であって、たしかに「牝魚」には違いないが、不十分な訓だが、『改正増補英語箋』の編者も、うまい訳語を見出せなかったものと思われる。「牝魚」を採用した以上、*Miller* は、『薩摩辞書』の説明の方を採用したものと考えられる。

3 「蟲」部門の増補語彙

3-1 [英語箋]における「蟲」部門の増補語彙

[英語箋]における『薩摩辭書』と関わる増補語彙を「魚介」部門、同様に示すと次の語彙になる。

- 百足 (ムカデ) *Centiped.* (ケンチベッド) ◎
蟲龍 (タリョウ) *Cockatrice.* (コッケイトライス) ◎
匍行虫 (フクカウムシ) *Crawler.* (クロウラア) ◎
蟋蟀 (コウロギ) *Cricket.* (クリケット) ◎
大ヒナル蠅 (オオヒナルハイ) *Flesh-fly.* (フレーシュフライ) ◎
録黽子 (コガ子ムシ) *May-bug.* (メー バッグ) ◎
龍盤魚 (イモリ) *Newt.* (ニュート) ◎
蛭虻 (ウシバイ) *Ox-fly.* (ラックスフライ) ◎
響尾蛇 (ケイビダ) *Rattle-snave.* (レットル ス子イク) ◎ [注: *snave* はまま、正しくは *snake*.]
蛞蝓 (ナメクジラ) *Slug.* (スラッグ) ◎
蟻蛭 (アリヅカ) *Ant-hill.* (エントヒイル) ◎
虻虫 (ハラノムシ) *Belly-worm.* (ベライ ウラーム) ◎
大蛇ノ名 (ダイジャノナ) *Boa.* (ボー) ◎
蠹 (ウシバイ) *Brise* (ブライジ) ◎
蛛網 (クモエ) *Cobweb.* (コブーエブ) ★
蜂蠟 (ミツロウ) *Wax.* (ウエックス) ◎
蛆 (ウジ) *Maggot.* (メゴット) ◎

この部門で問題になるのは、蠹として掲げたところの英語である。[*Brise.*] は今日の辞書には登録されておらず、『薩摩辭書』には、[*Brize.*] の見出しになっている、この両者も辞書にはない。The Oxford English Dictionary にも [Brize.] はない。ところが、両者の訳語が [蠹] で一致しているのである。これは『改正増補英語箋』が、明らかに『薩摩辭書』からの引用としかおもわれないのである。ただ、[2] を [5] に換えただけである。

3-2 『薩摩辞書』にみる〔英語箋〕に採り入れられたと思われる語彙の実態

- Centiped*, s. (センチペッド) 百足 (ムカデ)
Coekatrice, s. (コックエートライス) 蠃龍 (ダリョウ) ノ一種 (シュ)
Crawler, s. (コロール) 匍行虫 (フクコウチュウ)
Cricket, s. (クリケット) 蟋蟀 (コウロギ)。勝負事 (ショウブゴト) ノ名 (ナ)
Flesh-fly, s. (フレシフライ) 大 (オ、イ) ナル蠅 (ハイ)。
May-bug, s. (メーボク) 録臍子 (コガネムシ)
Newt, s. (ニュート) 龍盤魚 (イモリ) ノ類
Ox-fly, s. (ヲックスフライ) 蜚虻 (ウシバイ)
Rattle-snave, s. (ラトルス子ーキ) 響尾蛇 (ケイビダ)
Slug, s. (スリュグ) 蛞蝓 (ナメクジ)。懶惰 (ライダ) ノ人。妨 (サマダ) ケ [注:
 サマダーまま]
Ant-hill, s. (アント ヘル) 蟻塚 (アリヅカ)
Belly-worm, s. (ベルリーウワーム) 蝮虫 (ハラノムシ)
Boa, s. *Boaconstric-* (ブア) 大蛇 (ダイジャ) ノ名 [注: *Boaconstrietor* には訓はない。]
lor, s.
Brize, s. (ブライズ) 蠃 (ウシバイ)
Cobweb, s. (コブウェブ) 蜘蛛網 (クモノアミ)
Wax, s. (ウヲックス) 蜂蠟 (ミツロウ)。睽 (ミミアカ)
Maggot, s. (メッゴット) 蛆 (ウジ)

前述もしたが、*Brize* なるスペリングは現代の辞書にも *The Oxford English Dictionary* にも登録されておらず、『英和対訳袖珍辞書』には「*Brize* .s. 馬蠅」とあるので、それを受け継いだものであろう。これは明治4年版の『大正増補 和訳英辞林』(『薩摩辞書』第2版)、明治6年版の『寡准 和訳英辞書』(『薩摩辞書』)にも *Brize* としてそのまま掲載されている。ただし、訳は、『英和対訳袖珍辞書』の「馬蠅」ではなく、『薩摩辞書』の「蠃」を使用しているのは当然である。この *Brize* は『和英語林集成』(初版)(2版)(3版)にはなく、柴田・子安の『附音挿圖 英和字彙』にもない。*Brize* の「s」を「z」に写し間違えたとしても、訳としての「馬蠅」や「蠃」はどこからか、また、編者はなぜそのように訳したかという問題は残る。今は暫く問題のままにして置く。

3-3 「蟲」部門のまとめ

この部門における『改正増補英語箋』と『薩摩辭書』との関係は、「Cobweb」の訳語としての「蜘蛛」の訓が、「クモノアミ」と「クモノエ」の「アミ」と「エ」の相違を除けば、ほとんど一致している。「ほとんど」と云ったのは、「Cockatrice」の訳語の漢字の訓の「ダ」と「タ」（これは、音としてどちらでもよい）、「Crawler」の訳語の「フカウムシ」と「フクコウムシ」そしてその漢字としての「葡」と「匏」、「Flesh-fly」の「大（オ・イ）ナル」と「大ヒナル」、「Cobweb」の訳語の漢字の訓である「クモノアミ」と「クモエ」の「アミ」と「エ」の相違があるからである。しかし、『改正増補英語箋』の「葡」は、「大根」の意味であり、用字としては、『薩摩辭書』の「匏」の「這う、はらばう」の意味がよいわけである。これは音借したものと考えられる。『改正増補英語箋』の「大ヒナル」は明らかに誤りで、「大きなる」の音便なのであるから、「オ・イナル」でなければならない。「クモノアミ」と「クモエ」であるが、「クモエ」は、東條操編の『全国方言辞典』によれば、岡山県小田郡、広島県蘆品郡で「クモエ」、熊本県阿蘇郡、備前で「クモノエ」と出ており、意味の上では同じということになる。正しく、これが方言であれば、『改正増補英語箋』の編者に関わる問題となると思うが、今後の課題として措きたい。この「クモエ」を同じとみて、また、かなづかいや漢字の音借をも無視すれば、「蟲」部門の両書の関係は、一致するということが出来る。

4 この小論のまとめ

東京版の『改正増補英語箋』の「魚介」部門の語彙数は52語、大阪版のは75語である。また東京版の「虫」部門の語彙数は37語、大阪版のは46語である。東京版にはない大阪版の増補語彙は34語であるから、単純計算の75-52=23という数と34語との違いは、既に公にした諸論文にも述べたように、東京版のある語彙を捨てたことを意味するものであり、全ての部門についてそれは言えるのである。同様に、大阪版の「蟲」部門の増補語彙は17語である。「魚介」「蟲」部門について、両書にわたって問題なのは、先に触れたように「Brise」（大阪版）「Brize」（東京版）という英語と訳語である。「Brise」「Brize」もともに、今日の英語辞典あるいは、それに類したものには見出せない語であって、*The Oxford English Dictionary* には次のように、説明されている。

Brise. obs. rare (see quot)

1616 Surf. & MARKT. Countr. Farm 92 Afterward let him draw a Brise or two made fast

in the yoke 6 [magin. A Brise is a kind of ground that hath lyen long vntilled]
1721-1800 in BAILEY. Brise, obs. form of BREESE and BRUISE.

これを見れば、両書の訳語が出て来る筈もないものであって、しかも廃語となっているものであるから、尚のことである。しかし、「BREESE」を追えば、「あぶ」であり、それは、「gadfly」を特に指すようであるから「馬あぶ」(horsefly)ということになる。だから「蟲」(ウシバイ)でいいのであろうか、という問題が生じてくるのである。ただ方言では、「ウシバイ」といって、南島蜂重島(『全国方言辞典』)のように単に「あぶ」を指したとするのであれば、おのずから意味が違って来る。なお問題として残しておく。

さて、この二つの部門を、もう一度纏めてみれば、次の表のようになる。

	◎	★	☆	○	無	計
魚介	22	3	3	0	6	34
蟲	17	0	0	0	0	17

この表で「無」というのは、『薩摩辞書』との関係を見出せない語という意味で、「魚介」部門の場合は、『薩摩辞書』との何らかの関係ありと見た語彙は、28語である。この内、「蟹」は『英語箋』とも関係ありと見ているので、『薩摩辞書』の単独のものは、27語ということになる。「蟲」部門は全てが『薩摩辞書』と関係ありということになる。他の部門については、紙幅の都合で機会を別に譲る。

(岡山大学文学部教授)

〔参考文献〕

- 改正増補英語箋 (住田文庫蔵)
- 改正増補英語箋 (狩野文庫蔵)
- 薩摩辞書初版
- 大正増補和訳英辞林 (薩摩辞書 2版)
- 稟准 和訳英辞書
- 和英語林集成初・2・3版
- 英和対訳抽珍辞書
- 書言字考節用集